

令和7年産 コメ通信

第4号（令和7年6月11日）

【発行】

北秋田地域振興局農林部農業振興普及課
（電話：0186-62-1835）

茎数確保に向けた浅水管理の徹底を！！

1 気象経過と生育状況

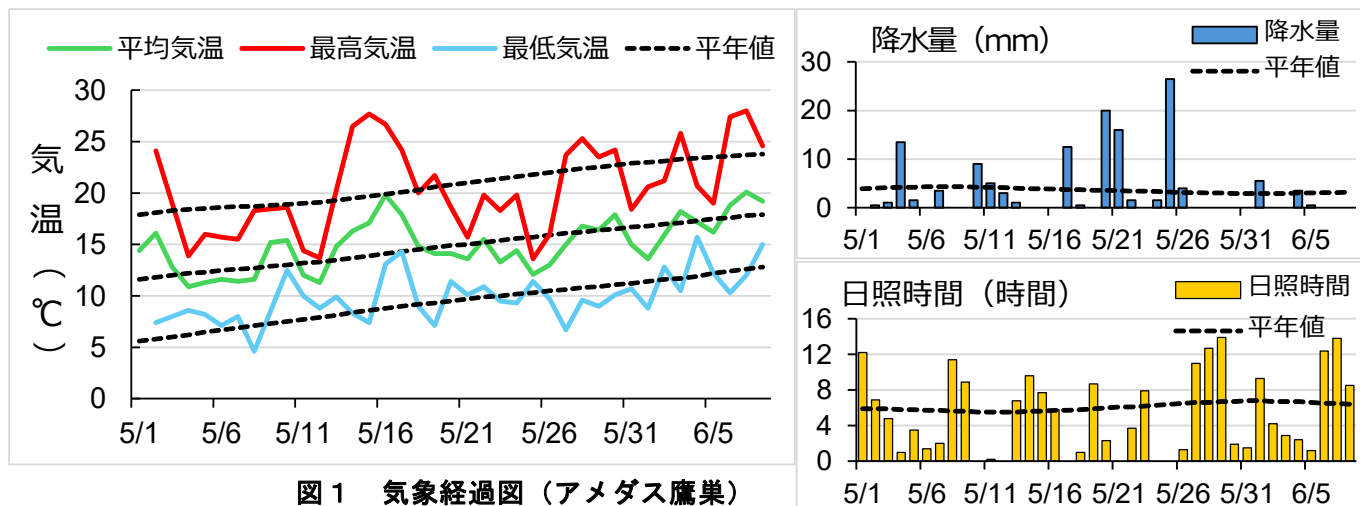


図1 気象経過図（アメダス鷹巣）

【気象経過】

○5月以降の気温は平年よりもやや低く推移し、周期的に変化しました。また、1か月を通じて断続的な降雨と曇天が続き、日照時間は平年よりも少なくなりました（図1）。

【田植え時期の気象】

○管内の田植え作業は、4月の連続した降雨による耕起作業の遅れに伴い、始期が5月18日（平年＋3日）、盛期が5月24日（平年＋3日）、終期は5月31日（平年＋3日）となりました。

○田植え翌日から5日間の移動平均気温は、田植え盛期である5月4半旬に中苗の適温とされる14℃を下回っていたため、活着が遅れたほ場が多く見られました（図2）。

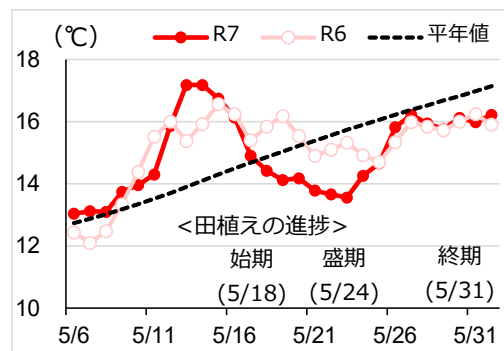


図2 田植え翌日から5日間の移動平均気温の推移（アメダス鷹巣）

【生育状況（定点調査結果）】

6月10日現在の生育（あきたこまち：9地点平均）は、草丈が平年よりも短く、茎数が少なく、葉数も少なくなりました（表1）。活着の遅れや6月1半旬以降に気温日較差の小さい日が多かったため、分げつの発生が緩慢になったとみられます。また、葉数の進展が遅れているため、生育も遅れています。

分げつの発生を促進し、早期に有効茎を確保するために、次に記した水管理を行ってください。

表1 定点調査結果（6月10日）

	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉数 (葉)
本年	23.5	148.1	5.9
平年	27.0	182.1	6.4
前年	25.7	166.6	6.5
平年比	87%	81%	-0.5
前年比	92%	89%	-0.6

2 当面の水管理

【茎数確保に向けた水管理】

- 分げつ発生は、日平均水温が23～25℃で、昼夜の水温較差が大きい場合に促進されます。このため、かん水は水温の低い早朝に短時間で終えるようにし、日中は止め水とすることで、地温と水温の上昇を促進します。
- 活着後は基本的に浅水管理とし、水温と地温を高め、分げつの発生を促進しますが、日中の最高気温が15℃以下の低温時は深水にします。

【異常還元（ワキ）対策】

- ほ場に足を踏み込んだ時に勢いよく気泡が発生し、下葉の黄化や赤褐色斑点が多く見られる場合は、落水や間断かん水を行い、根の健全化を図りましょう。
- 落水する場合は、除草剤やオリゼメート粒剤等の散布後日数に注意してください。

【適期の中干しによる弱勢茎の抑制】

- 中干しを行うことで、弱勢茎（穂になりにくい茎）の発生が抑制されることに加え、受光体勢が良くなるため、倒伏軽減効果が期待できます。
- 目標穂数と同数の茎数（70株植では1株あたり20本程度、60株植では1株あたり25本程度）を確保したら、直ちに中干しに入りましょう。中干しの期間は7～10日ほどで、軽く足跡が付く程度（亀裂が1～2 cm程度）を目安とします。
- 溝掘りを行うことで、その後の水管理や秋の刈取作業を円滑に行えるようになりますので、積極的に行ってください。

3 病虫害防除対策

【葉いもち防除】

- 初期の発病を抑えることで、その後の葉いもち発生量及び穂いもちの伝染源を減少させることができます。葉いもち防除として箱施用剤や側条施用剤を使用しなかった場合は、オリゼメート粒剤を6月15日頃（6月12～18日）に10 a あたり 2 kg 散布します。
- オリゼメート粒剤は湛水状態で田面に均一に散布し、散布後4～5日間は水を入れないようにします。また散布後7日間は止め水とし、かけ流しや落水は行いません。
- 補植用余り苗は、いもち病が発生しやすく周辺ほ場への伝染源になります。ほ場に放置されている余り苗が散見されますので、直ちに泥に埋めて処分してください。

【斑点米カメムシ類対策】

- 残草したノビエやホタルイ類等は、斑点米カメムシ類の増殖源となります。草種に応じて中・後期剤を適切に散布し、雑草対策を徹底してください。また、近年は高温により雑草の生育が早まる傾向にあるため、雑草の生育状況を確認し、処理時期が遅れないようにしましょう。
- 病虫害防除所による発生予報（令和7年5月27日発表）では、斑点米カメムシ類の発生時期はやや早いと予想されています。斑点米カメムシ類の生息地を減らすため、畦畔や農道に加えて休耕田や雑草地を対象に、6月上旬から出穂10～15日前まで数回、草刈り作業を地域でまとまって行ってください。

問い合わせはＪＡまたは農業振興普及課まで～次回発行は6月下旬頃～